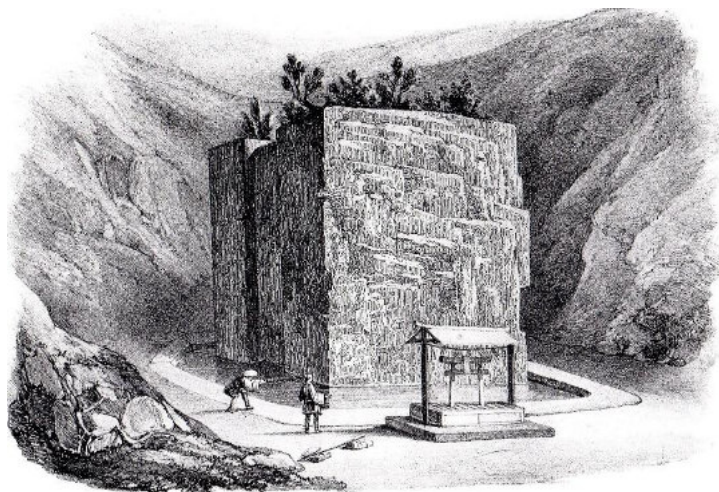


2017年7月 近畿旧友会ハイキングクラブ「燦歩会」例会（第461回）

青春18切符で「鶴林寺」と「石の宝殿」を訪ねる(兵庫)

なんとも不思議な巨岩「石の宝殿」。
その全貌を写した写真は存在しません。
あまりに大きく、周囲の空間が狭いため、
「引き」が撮れないのです。
それに比べると、絵画の視点は自由です。
先にご覧いただきましょう。
ドイツで19世紀半ばに出版された
シーボルトの大著「NIPPON」、
「石の宝殿」の挿絵です。



7月23日（日）、青春18切符で、
兵庫県加古川市、高砂市を巡りました。

* * *

午前11時JR加古川駅前。商店街のデジタル温度計は既に31.3度を示していました。
熱中症を警戒しながらの燦歩会です。参加は男性14名、女性3名。
京都、大阪南部、奈良からの12名は「青春18切符」でまとまって、
それより近い5名の会員はそれぞれで、加古川駅に集合しました。

加古川の古い街並みを歩きながら、先ずは春日神社へ。
夏休みに入った女の子とお父さんが、セミ捕りに懸命でした。
私たちの関心は、境内の小さな社、赤壁大明神。
普通なら白壁の部分が、真っ赤です。
そして神前の香炉（黄丸印）には、ネコの彫り物が。



この社には、賭け事を巡っての怪猫伝説があり、
壁が赤いのは、猫の血潮だということです。
講談で語られて有名になり、戦前には何本か活動写真にも
なったという事です。

でも今や猫も可愛らしく、開運招福の守り神になっているようでした。

加古川のこの辺り、しきりと「ニッケ」の名前が目につきます。

「ニッケ」とは「日本毛織」、国内でトップクラスの毛織物の会社で、詰襟の学生服やセーラー服の生地でもおなじみの会社です。

1899（明治32）年に加古川工場で操業を始め、今では、「ニッケ」の略称で多角経営を進めています。ニッケの名を冠したショッピングモールもある程です。



日曜昼どきの静かな住宅街、社宅や従業員寮が建ち並ぶ中に、

「ニッケ社宅倶楽部（くらぶ）」の瀟洒な洋風の建物もありました。

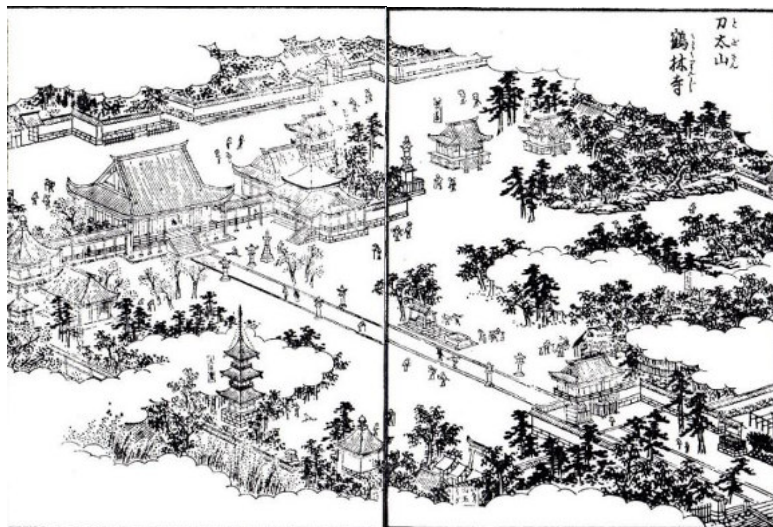
加古川工場が操業を始めたころ、欧米から招いた専門技術者が指導に当り、その住宅として洋風の建築が建てられました。

外国人技術者が役目を終えた頃からは、建物は集会所などに使われるようになり、現在は「社宅倶楽部」という名で残されているのです。

加古川で最後に訪ねたのは名刹「鶴林寺」です。

「鶴の林」とは、「お釈迦様の亡くなったのを悲しんだ沙羅双樹(さらそうじゅ)の樹が枯れて鶴のように白くなった」という伝説に由来します。

19世紀初めの「播磨巡覧名所図会」にも鶴林寺の盛んな様子が描かれています。



昼食後、ボランティアガイドさんに国宝建築の建ち並ぶ境内と宝物館を案内して頂きました。

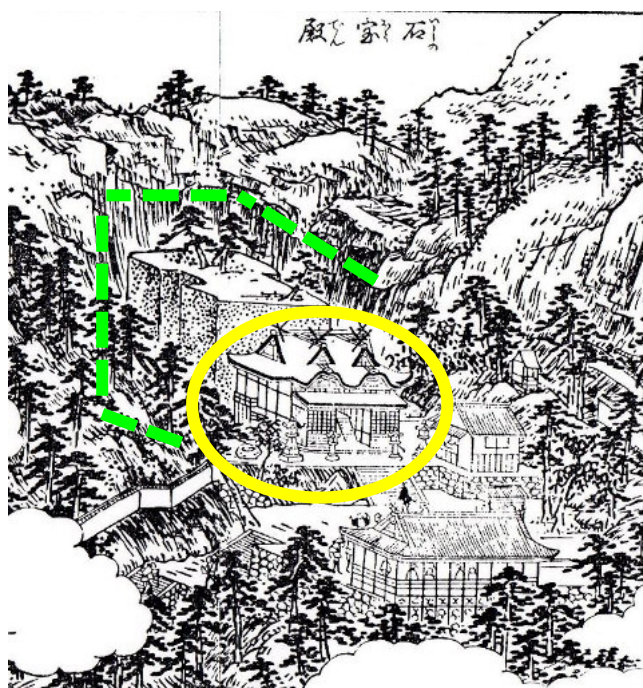
白鳳時代の名品、「重文 金銅聖観音像」のあどけなく優美な表情。

赤外線写真で発見された太子堂の壁画「阿弥陀来迎図」の復元は、夢のように美しい浄土の姿を見る事が出来ました。

午後は別行動の会員も居る為、ここで全員写真です。



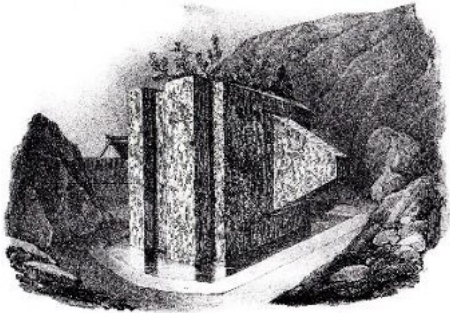
JR加古川駅に戻り、山陽本線で西へ一駅、「宝殿（ほうでん）」で下車。
駅の西2キロ程の小高い山を目指します。
山の中腹に巨石をご神体とする生石（おうしこ）神社が見えてきました。



名所図会には、まるでドローンで撮影したかのように、俯瞰で描かれています。
黄丸が生石神社、黄緑枠が巨石「石の宝殿」です。

急な石段を登りつめて神社に到着、
門をくぐって目にしたのは、視野いっぱいに広がる岩肌。
真正面に巨石がドンと座っているのです。圧倒される存在感です。
幅、高さ、奥行きがいずれも6メートルほどの真っ四角な巨石。





表面は人の手で整然と加工されています。
奥行き半ば程には浅いベルトが掘られ、
また石の裏側には、屋根の様な2メートル近い
出っ張りがあります。
ちょうど祠を仰向けに寝かせたようで、
これが宝殿と呼ばれる謂われでしょう。

全体が周囲の山から掘り抜かれ、巨石と山の間は人一人が通るほどの隙間しかありません。
岩の根元は水に漬かって、定かに見る事は出来ず、「浮石」とも呼ばれます。
情けない事に、カメラのレンズを目一杯広角にしても、岩の一部しか写せません。
誰が何のために掘り出し、工作したのか？
謎には何の手がかりも無く、天下の「三奇」のひとつと称されるのもうなずけます。

神社の社伝では、二柱の神が国土経営のため出雲国から播磨国に来て、石造の宮殿を
建てようとしています。一夜の内にここまで造ったものの、土着の神々の抵抗があり、
夜が明けてしまい、宮殿は横倒しのまま起こすことができなかつた。というのです。
最近では古墳の石槨（石室）の作りかけの物ではないかと、考えられています。

石の宝殿の凄さにあっけにとられた12名も、幸い熱中症に罹る事もなく、
予定通り宝殿駅発16時01分の列車で帰路につきました。

* * *

いつもながらの蛇足で失礼します。

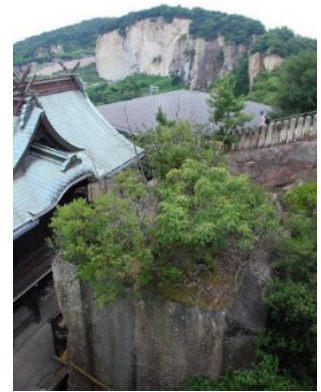
蛇足の1 シーボルト

長崎オランダ商館の医師シーボルトは、1826（文政9）年、オランダ商館長の江戸参府に
随行します。当時30歳、2月15日に長崎を発ち、3月10日（旧暦2月2日）午前9時
姫路を出て加古川に向かいます。雪が降り気温は摂氏4度ほど。雪融け道に難渋しながら、
曾根に着き昼食。午後は有名な寺社を巡ります。曾根の「天神さまが自ら植えたという松」、
「突然巨大な石が出てきたという」石の宝殿。そして、高砂の松は、「我が国のボダイ樹の
ような形で、いきいきと枝を拡げ、枝の直径は28ないし30尺に及ぶ」と記しています。
シーボルトは文章ではあまりおどろいた風には見受けられないのですが、石の宝殿の挿絵を
3枚も掲載しています。

（道中の絵の多くは、長崎の絵師川原慶賀が描き、ドイツで出版する際に石板に刻まれたと
考えられています。建物が中国風に見えたりするのは、その故でしょうか？）

蛇足の2 竜山石（たつやまいし）

「石の宝殿と竜山石採石遺跡」は、2014年、国の史跡に指定されました。写真の奥に白く見えるのが採石場、手前の木の生えているのが「石の宝殿」です。高砂市のこの地に産する凝灰岩は、竜山石と呼ばれ、固くしかも加工が容易であることから、建築の礎石、石垣の他、狛犬、石仏、灯籠、白などの石材として永らく使われてきました。古墳の石棺としても各地に運ばれ、全国で確認されている石棺1,564基の内、竜山石製は560基で35%を占めるといわれる程です。大和の古墳の石棺も竜山石製は多く、両地のかかわり、石を通じての交流は、濃かったと考えられています。例えばこの「国史跡 橿原菖蒲池（しょうぶいけ）古墳」の家形で精巧な作りの石棺も竜山石製と云われています。その竜山石の工作物の最大のものが「石の宝殿」なのです。



蛇足の3 益田の岩船

作家松本清張は小説「火の路」で、奈良の明日香村近くに残る巨石遺跡「益田の岩船」と、この「石の宝殿」に相通ずるものを感じています。

（益田岩船の所在地は、明日香村に隣接している橿原市白橿町です）

松本清張は、この益田の岩船を、ゾロアスター教の拝火壇のようなものと考えました。眼下に飛鳥一帯を見晴らすかす絶景の地で火を焚き、宗教行事を行う施設。そして、「宝殿」の岩は、その工作の類似から、益田岩船の神殿のようなものとして準備され、何らかの理由で放棄されたのではないかと。どちらも謎に包まれている所が、作家の該博な知識に訴えかけ、壮大な想像をかき立てたのでしょ。

益田の岩船は、弘法大師が築いた溜池「益田池」の記念碑の台座という伝説があります。しかし、碑があまりに巨大になり、現実的でないと考えられています。また、その碑石を砕いて、近くの高取城の石垣に使ったという、伝説もあるとか。星占いをする台座という、松本清張説に通じるような考えもあります。また、古墳の石室の建造途中で失敗して、石にヒビが入り、そのまま放置されたという考えもあります。四角い穴の片方は、ひび割れの為、雨水が溜まらないそうです。



写真は、1985年に撮影した益田の岩船です。

遠方の右山際には天の香久山、左奥には耳成山が見える絶景の地ですが、今日では竹林が生い茂って、このような風景は全く見る事が出来ません。

* * * * *

ご案内

旧友会員の方、職員の方、入会大歓迎です。

入念な下見を行い、中途離脱も可能なルートを設定して、**毎月第4日曜日**に歩いています。メンバーはおよそ50名、その日の都合と体調に合わせて自由参加です。

今後の予定

- 8月 暑さを避けて休会
- 9月 コスモスの斑鳩三塔（奈良）
- 10月 吉備路の旅（1泊）
- 11月 京都一周トレイル（9年計画の第1回です）
- 12月 納会
- 1月 道明寺天満宮で初詣（大阪）
- 2月 どんづる峰を訪ねる（大阪・奈良）
- 3月 御坊と道成寺（青春18切符を利用 和歌山）

参加ご希望の方は、山村恵一さんにご連絡下さい。（電話 0743-20-4159）
一緒に気軽に楽しく歩きましょう。

生島(おじま)幸弥